

第7回研究実践奨励賞

◆受賞のことは◆

『自分ごと』として捉える支援

大橋 理美

(福祉学科 2020 年卒業)

この度は、研究実践奨励賞を賜りましたこと大変光栄に存じます。

現在、私は知的障害のある方が暮らしているグループホームで支援に携わっています。そこでは、重度の方と中軽度の方が共同生活されており、今回の研究で考察した自己決定支援の現場に立ち会う機会も多くあります。

重度の方については、コンビニで買うお菓子は何にするか、明日の洋服は何にするかなど、その方の希望を汲み取りながら自分で決めてもらうようにしています。しかしながら、共同生活をしていくということは、時にはその方の希望通りにはいかないということでもあります。自己決定支援を重視するには、自分で決めたことを実践するまでが支援者の支援になりますが、実際には支援者が実践を制限してしまうこともあります。自分で決めたことを決めたようにやってほしい、けれども、周りとのバランスを考えていかないとトラブルにつながってしまう…その狭間で葛藤する日々です。同時に、今回の研究では触れていない中軽度の方の自己決定支援についても考えるようになりました。支援がなくても意思を伝える手段を持っている方には、つい『自分で決められるはずだ』というプレッシャーをかけてしまっていると感じています。そのような時、自分自身はどうだろう、と考えます。仕事で疲れて帰ってきた後に『今度のお出かけはどうするんですか?』『お風呂や食事は何時からにしますか?』そんな質問を投げかけられると、普段は難なく決められていることも『もう決められない!』と匙を投げたくなるかもしれない。自分で決める、ということは案外負担を感じる行為なのではないでしょうか。自分ごととして捉えることが自己決定支援の促進につながる要因として考えていたことを今強く実感しています。

実際に現場に出ると、頭の中のイメージと現実で起こることには大きなギャップがありました。将来を見据えた自己決定支援の促進を論文で大きく掲げたにもかかわらず、今この瞬間に向き合うことで精一杯になってしまいます。

そのような中で、支援者も同じ人間であることをわかってもらうことが大切なのではないかと思います。

『支援者は完璧じゃないんです。わからないこと、わかってあげられないこともたくさんあります。だからあなたが楽しく生きていける方法を一緒に考えていきませんか?』

自己決定支援をあたりまえの支援にしていくためには、障害のある方にとっても支援者にとっても負担のない支援にしていく必要があると思います。だからこそ、この問いを投げかけてその方に合った支援をこれからも考え続けていきたいです。

最後になりますが、投稿にあたり大変お世話になりました運営委員会の皆様、このような学びの機会をくださり、ご指導いただいた富田先生、何より本研究にご協力くださいました実践者の皆様にはこの場を借りて心より感謝申し上げます。